

新シリーズ：シリアの牧畜社会の変容と資源管理

第1回：牧畜民の定住化

シリア北東部の牧畜民の本格的な定住化は1950年後半以降おこなわれた。それ以前においてジャジーラとも呼ばれるこの一帯は、ハブール川やトルコ国境近くの耕作地帯をのぞいて定住集落はごく限られた一部の土地で成立していたにすぎず、牧畜民が広範囲に遊動する放牧地であった。19世紀から20世紀初頭にかけて当該地域を訪れた欧州の旅行者たちは肥沃な大地が牧畜民に占有される様になにげな驚きを呈している。ところで、50年ほど前からの一連の定住化への流れは、国家政策による外部強制的なものというより、ジャジーラ平原で急速に進んだ農業開発と同時に並行して牧畜民が自律的に近代農業をかれらの生業に取り込む過程で生じたものと考えられている。しかし、定住家屋を築いて耕作を開始したところで、それは天水依存の原初的な農業形態であり、作付けも大麦主体で本業である牧畜の補助生産の域をでない。したがって、農耕地が拡大し相対的に草原面積が減少した環境下で、彼らが農業に手をつけたとは言え、農耕地と草原の往復などの積極的な季節遊動を継承し、仕切りなおしをして、新たな牧畜経営に適応していったという見方も成り立つであろう。

そもそも牧畜民とは、何だろうか？「動物の群れを管理し、その増殖を手伝い、その乳や肉を直接・間接に利用する生業の民」というのが一般的ないし原則的な類型としての定義となるが、現実の世界には多種多様な形態の牧畜が存在している。また近年の近代化の波及により、おなじ牧畜民であっても歴史過程で農耕や他の生業と複合化し、それらの組み合わせの比率からさらなるバリエーションが生みだされてきている。それは、生業様式として生活のすみずみにまで影響を及ぼす点で、先進国における産業としての「畜産」とも一線を画している。とまれシリアにおいて、都市居住者がしばしば牧畜民を指し示す「ベドゥ」という呼称には、砂漠の劣悪な生活への憐れみとも軽蔑とも解釈される語感とあらはらに、自分たちでは生きていけない過酷な場所で生活を成立させる人々への畏怖が複雑に入り混じったまなざしとして受けとめられる。

これまでAAINewsでは、シリアに関する話題として、〈シリアの自然と農業〉、〈農業普及〉、〈園芸療法〉など何度か取りあげられてきている。新シリーズでは、シリア北東部、ハサケ県のジャジーラ平原のほぼ中央に位置するアブド・アルアジズ山地に居住するアラブ系牧畜民バッガーラ族にスポットをあてる。そして、牧畜および天水農業など基軸となる生業活動およびその変遷を紹介しつつ、放牧地利用のありかたや現在彼らが直面している問題点について整理してみたい。とくに、アブド・アルアジズ山地の環境史に立脚しながら、草原生態系における資源管理という観点から乾燥地の環境利用に対して多角的な検討を加えていくつもりである。



バッガーラ族とベート・シャル(黒ヤギの毛で編んだ天幕)



アブド・アルアジズ山地の遠望

第2回：バグガーラ族とアブド・アルアジズ山地

牧畜民が日干し煉瓦の家を建て、ムギ類の機械化近代農業の生業への組み入れを契機としてアブドアルアジズ山地（以下、AA 山地）における定住化の開始とすると、バグガーラ族（以下、Baqqara）の定住化はわずか 50 年たらずの歴史でしかない。この歴史の浅さにくわえ、いまに至るまで完全定住型の生活様式に移行したとは言えず、家畜を引きつれた季節移住も活発におこなわれてきている。したがって、Baqqara の現況としては、あくまで定住「化」であるが、この半世紀の月日の間には生活のいくつかの局面において顕著な変化があった。列挙すると、まず道路網が発達し、車やバスの使用が増えたこと。それにつれ、重要な移動・運搬手段であったラクダの相対的地位が低下し、ラクダを手放したこと。定住村に小学校が建設され子供の教育が充実したこと。市場へのアクセスが容易になったことから乳・乳製品の都市市場への出荷が増大したこと。食生活の面では、現金により購入した野菜類を食べる機会が増えたこと、各世帯が家屋横のかまどで日常的にタンノール・パンを焼くようになったことなどがあげられる。さらに、このような外面的変化にとどまらず、もはや遊動的な生活様式の「ベドゥ」としての自負ではなく、むしろ定住者、都市居住者としての「ハダール」であるとの意識が強まってきている。しかし、都市部との大きな相違点は、いまでも根強く保持している共通祖先の記憶を共有する部族への帰属意識や紐帯であろう。部族長の社会的リーダーとしての存在感はとみに薄れ、その政治的影響力は以前とくらべ相対的に弱まったとされるが、成員間の紛争解決などの際には隠然たる力を持ちつづけている。

Baqqara は、19 世紀にはユーフラテス川を拠点に、夏の河川水を利用したモロコシなど雑穀類の簡単な作付けと冬の放牧地とを往復する季節遊動を繰り返しながら、20 世紀の初めまでに支流であるハブール川に沿って北上し、さらに土地利用権を広げていった。Baqqara の分布範囲は、南はデリゾールから北はトルコ国境のラスアルアインまで、西はラッカから東はハブール川右岸にかけてである。現在の Baqqara は約 27 支族に分節化しており、各支族長が並び立つが、大きくは Baqqara al zor と Baqqara al jabal の 2 つのグループにわかれている。Baqqara al zor は、デリゾール県のユーフラテス川沿岸から AA 山地の南麓を主要な分布域としている。他方、Baqqara al jabal は、ハブール川上流部との往還により AA 山地およびそれ以北のハサケ県北部へと分布を拡大してきたグループである。活動域の拡大は、時には放牧地争いや他部族との抗争を生みつつも、次第に部族の領域を確定させていった。そして、機械化ムギ作の近代農業が普及する 1950 年代後半には Baqqara の各支族の部族民も世帯ごとに居住地を割りふられ定住化していった。その居住地周辺にたまたま山地があれば従来型の放牧中心の生業を維持し、たまたま川などがあれば、一部では積極的にコムギ、ワタの灌漑農業を導入し、家畜を手放して生業の鞍替えを図った。

牧畜を主たる生業とする部族の土地区分は、境界線が農耕地ほどはっきりしておらず曖昧である。しかし、放牧地を相互にオーバーラップさせながらも、支族単位の社会的分割による明確な土地区分が存在している。AA 山地においては、Baqqara 全 27 支族中 5~6 支族の Baqqara al jabal が各々の領域を住みわけている。次号では、筆者が 1993~96 年にかけて参与観察を実施した定住化過程の Baqqara al jabal に焦点を絞り、AA 山地における土地利用について詳細をみていく。



日帰り放牧



村の水汲み場



日干し煉瓦定住家屋の補修